

# 大 失 敗

野 村 ヒ サ

昭和55年の2月中旬に私はひとりでロンドンに滞在し、いろいろ楽しい経験もしたが、またかずかずの失敗もした。生来のそこつさは外国へ行ったぐらいでは直らないものらしい。今回はその失敗談を御披露しようと思う。

その第一は、マーチャント・ティラーズ・スクール (Merchant Tailors' School) あとの探索である。この学校はエドモンド・スペンサー (Edmund Spenser) (1552—99) の母校で、イギリスの名門校十校のうちのひとつに挙げられる。現在ではノース・ウッド (Northwood) にあるが、ロンドンのサフォーク・レイン (Suffolk Lane) に1561年に開校したという記録がある。その年にスペンサーが9歳で入学したことが明らかになったのは、19世紀になってからであった。マーチャント・ティラーズ・スクールの400年史によれば、1877年にはじめて明らかになった奨学金を授与された生徒たちの名前の最初にエドモンド・スペンサーの名前が見られる。(Edmunde Spensore と綴られている。)そして彼がケンブリッジ大学のペンブルックホール (Pembroke Hall) に入学してからも、あいかわらず奨学金が与えられていた。英国五大詩人の一人であるエドモンド・スペンサーの出身校自体で (いくら低い身分の生まれであったとはいえ) 316年もの間まったく不明であったということはその学校の一大失策であったといえるのではあるまいか。創立250年余の記録にもスペンサーのスの字も述べられてはいない。

日本を発つ前に主人からサフォーク・レインのあたりをよく調べて、その場所がわかったら番地を記録したり、写真をとったりしてくれるよ

うにと云われて、私は引き受けて来ていた。マーチャント・ティラーズという学校はジェイン・オーステン (Jane Austen, 1775—1817) の *Northanger Abbey* の第四章にも出てくる名である。そのため、その学校のあった場所がわかれば私の好奇心も一部は満足させられるわけであった。

下宿の生活にもすっかり馴れた頃、私は A to Z でサフォーク・レインの所在をしらべた。地下鉄のマンション・ハウスの駅からいちばん近そうなので、そこで下車して、そのあたりからブリティッシュ・レイル (日本の JR にあたる) のキャノンストリート駅の近くまで歩きまわって会う人ごとにたずねたり、たんねんに調べてみたがわからなかった。1 日目はまったくわからずじまいで足を棒にただで下宿へ帰った。2 日目も午後から同じ町へ出かけその通りの店や事務所を一軒一軒たずね歩いた。サフォーク・レインという通りは比較的短かいのである。「そのマーチャント・ティラーズ・スクールはいつ頃このあたりにあったのか。」ときかれて、私が「約400年前に開かれたと聞いている。」と答えると、大ていの方は「何て変なおばさんだろう。」といわぬばかりの顔をした。中にはエドマンド・スペンサーを知らない人もいた。私たち日本人のうちにも室町時代の詩人の名前をいきなり外人から言われたら、きょとんとしてしまう人もいるだろう。マーチャント・ティラーズ・スクールのモニュメント (monument) あるいはそのようなものがないかしらとたずねたら、「モニュメントは大きい有名なものがある。」といって教えてくれた人があったが、それはロンドン大火 (1666年) の記念碑であった。(そんなものはとうの昔によくわかっていた。)

3 日目、また同じサフォーク・レインに出かけた。仕事でひと息いれているれんが職人と立ち話をしていて「このあたりでいちばん古い建物は何ですか。」と私がきくと「もちろん、セント・ポールズ (St. Paul's Cathedral) だ。」という返事だった。セント・ポールズは非常に大きな

(また有名な)建物で、目前にそびえたっているのだからそのドームはサフォーク・レインからはもちろんテムズ河のむこう岸からもよく見える。(ロンドン最大の大聖堂である。)1561年当時の教区はどうなっていたのかしらと思い、仕方なくセント・ポールズへでも行ってみようかしらと考えて、ぶらぶらと歩きはじめると、通りの右側の赤れんがの建物の壁に金属製の板がはってあるのに気がついた。何だかひどくむずかしい英文が書かれてあって(ラテン語の語順のようである)ジョン・ミルトン(John Milton, 1608—74)の名が見える。その銘文は次のようなもので大文字も原文のままである。

Three Poets in Three distinct Ages born Greece, Italy and England did adorn. The first in Lofty thought surpass the next in Majesty in both the last. The force of Nature could no further go. To make the last she joined the former two.

John Milton

was born in Bread Street on Friday the 9th day of December 1608 and was baptised in the Parish Church of All-Hallows-Bread-Street on Thursday the 20th day of December 1608.

This table was placed on the Church of All-Hallows-Bread-Street early in the nineteenth century as a memorial of the event therein recorded and was removed in the year 1876 when that church was pulled down and the parish united for Ecclesiastical purposes with the parish of St. Mary-Le-Bow.

むずかしい英文なので、自己流に訳せば、また大失敗になるかもしれないが、だいたい次のような意味だろうと思う。

三つの傑出した時代に生まれた

三人の詩人は

ギリシャ、イタリー、イギリスを飾った。

最後の詩人は

先ず最初の両詩人の高尚な思想を

次には両詩人の威厳をも凌駕した。

自然の力もそれ（最後の詩人）を

超えることは出来なかった。

最後の詩人を生み出すために

自然は前の両詩人を結合させた。

（註） 3人の詩人というのはホーマー、ダンテ、ミルトンを意味する。

ジョン ミルトン

は、1608年12月9日金曜日にブレッド・ストリートで生まれ、1608年12月20日木曜日にオール・ハローズ・ブレッド・ストリートの教区教会で洗礼を受けた。

この板は19世紀初頭に、そこに記録されている事件の記念碑として、オール・ハローズ・ブレッド・ストリートの教会にすえつけられていたが、1876年にその教会が取りこわされ、教会の目的のために、その教区が、セント・メアリー・ボウ教会の教区と統合された時、（現在の場所に）移された。

つくづくと銘文を眺めていると

“Can I help you ?”

と男の人の声がした。振りかえってみると、黒っぽい服を着た50がらみの大柄な紳士が微笑みながら立っていた。私が「この英文の意味がよくわからないのです。」と云うと、その紳士は自分もよくわからないが、とことわりながら、詩人 John Milton をほめたものであること、また彼がこの教会（そのれんがの建物は St. Mary-le-Bow Church（セント・メアリー・ル・ボウ・チャーチ）という、かなり有名な教会だった。）の

前に建っていた教会で洗礼を受けたことを説明してくれた。そのあとはっきりした美しい英語でその紳士は自己紹介をした。自分の名は Gustav Wiegand (グスタフ・ヴィーガント) といって、セント・メアリー・ル・ボウ教会の牧師であると云った。私は嬉しくなってサフォーク・レインのことをたずねてみた。マーチャント・ティラーズ・スクールのあとをたずね歩いて3日目だと話すと、自分はロンドン生まれのロンドン育ちで、この教会に数年いるが、400年以上も前のことは全然わかるまいと言った。それから私はセント・メアリー・ル・ボウ教会の地下に案内された。ヴィーガント師は、ローマ軍団が紀元前にロンドンにやって来て建てた建物のあとに教会が建てられ、それが1666年のロンドン大火で焼け落ち、再建され、その建物が第二次世界大戦中にナチの空襲で焼け、そのあとまた建て直された歴史をゆっくり、ていねいに説明してくれた。\*また師はセント・メアリー・ル・ボウ・チャーチには一年に3、4回だがクイーン・マザーやプリンセス・マーガレット(レイディー・スノードン)が来られるということをいくぶん誇らしげに付け加えた。ヴィーガント師の説明をきいているうちに私はだんだん気分が落ち着いてくるのを感じた。マーチャント・ティラーズ・スクールあとの探索は失敗に終わったが、私はこのグスタフ・ヴィーガント師と今でも手紙をやりとりしている。1983年ケンブリッジ滞在中も電話で話し合ったり、ロンドンへ出た時には立寄ったりした。蛇足だが、セント・ポール寺院の設計者サー・クリストファー・レン (Sir Christopher Wren) は1632年生まれだから、もし、あの時、私がセント・ポールズへ行ってマーチャント・ティラーズ・スクールのことをきいてみてもわからなかったと思う。

失敗の第二はスティーブントン (Steventon) 行きである。ある日、下宿で夕刊 (たしかイーブニング・スタンダード ((Evening Standard)) だったと思うが) を読んでいた私は、スティーブントンのジェイン・オー

ステンの生家（の納屋）が70000ポンドで売りに出されているという記事を目にした。（当時の1ポンドは515円ぐらいだったと思う）帰国の日は3日後に迫っていたし、この次に英国に来る時にはすっかり変わってしまったかもしれないという思いに駆られて、私はにわかにはステイブントンへ行ってみようと思立った。翌朝さっそく、ヴィクトリア駅のインフォメーション・センターへ行きデスクのむこう側でんと腰かけている肥った婦人に「ジェイン・オーステン・カントリーのステイブントンへ行くにはどう行ったらいいか」ときいてみた。その婦人は気軽に相談にのってくれ、パディングトン（Paddington）からlocal（鈍行）列車に乗りデイドコット（Didcot）で下車してタクシーを拾えばすぐだと教えてくれた。親切なその婦人は列車に乗るまえにデイドコットに停車する（英国では*calling at*を使う）かどうか確認してからにしろとか、月曜から金曜までの時刻表は土曜や日曜とは異なるから注意しなさいとか、こまごまと教えてくれた。私は感謝してそこを去り、駅の食堂（Travellers' Fare）で早目の昼食をすませ、わくわくしながら列車に乗りこんだ。「あの青いプレートはどこに張られているかしら。」などと列車の中で考えて心がはずんだ。（英国では、有名作家にゆかりのある建物には玄関のドアの上方の外壁に青い丸いプレートが張られている。もっともミルトンのは四角いプレートだが。）デイドコットの駅前にはタクシーが6～7台のんびりと客待ちしていた。「ステイブントンまで。」と言ってその一台に乗り込むと運転手は車を走らせながら何しにステイブントンへ行くのかときいた。私がジェイン・オーステンの生家を見に行くのだと答えると、彼はそういう名前の人は知らないと言った。少し変だなとはじめて気がついたが、まあ行ってみればわかるだろうと思い、それ以上は何も話さないでいるうちにやがて車はステイブントンの村についた。私が番地も知らないので運転手はガソリンスタンドの前に車を止め、たずねてたがその人も知らないらしい。「そんな

はずはない。」と私はあきれて「村の教会まで行っておろしてくれ。」と運転手にたのんだ。教会はすぐわかった。静かなさびれた教会だった。車をかえして教会の裏手にまわってベルを押すと、牧師の奥さんが出て来た。ジェイン・オーステンの生家が売りに出されているそうだが、1度見たくてやって来たと言っていると「私はよく知らないし、そんなことはきいたことがない。」という返事である。牧師はロンドンへ行って留守であった。少し迷惑そうにしていたが、その婦人は私に、「ジェイン・オーステンの生まれ故郷はここではないと思う。」と言った。私はそれでも何のことかわからず、「誰か昔のことをよく知っている人はいませんか。」と勇気を出してたずねてみた。少し考えてから牧師の奥さんは

“Then, we'll go to the most learned man in the village.”

と言って親切にも私を案内して、そこから歩いて5分ほどの古い大きな家につれて行ってくれた。私はだんだん心細くなって来た。こんなさびれた村にひとりで来ることさえ私にはずいぶん勇気のいることなのに、その上、どこか見当ちがいの場所であるらしいと感じはじめたからである。私たち二人を出迎えてくれた背の高い老人は、オックスフォード大学の卒業生だと自己紹介して私たちを部屋に案内してくれた。庭の木の下に円形に植えられたクロッカスの花が大そう可憐なのが印象的だった。その老人は私に「誰にこの村のことを教わったのか」ときいた。私は「ヴィクトリア駅のインフォメーション・センターにいる婦人にきいた」と答えた。すると彼は「残念だが、彼女はジェイン・オーステンカントリーのことを何も知らないらしい」と言い、「英国にはスティーブントンという名前の場所は1つではない。ここはオックスフォードシャー (Oxfordshire) のスティーブントンである。あなたの行くべき場所はもうひとつのスティーブントンでそれはハンプシャー (Hampshire) にある。」と教えてくれた。私は穴があったら入りたい思いだった。困惑している私に、その老人は、Milton (ミルトン) とい

う名の場所は彼の知る限りでも六つ以上あるとあって、私をなぐさめてくれ、ロンドンの下宿へ帰って私のなすべき第一のことはハンプシャーの地図（ミシュランがいいとすすめてくれた）を買ってよく調べることだ。」と教えてくれた。紅茶をごちそうになり世間話をしているうちに私の心からみじめさがだんだん消えて行った。オックスフォード行きの赤バスの停留所へ案内してもらい、柔らかな早春の陽ざしの中でバスを待っていると何だかひどくおかしくなってきた。いったい何でこんな失敗をしたのだろうと思った。原因の第一は何時もの自分に似合わず地図も用意しなかったこと、第二にはヴィクトリア駅の案内所で相手の婦人がジェyson・オーステン・カントリーという語を耳にとめてくれたかどうかを確かめないで他の語にばかり気をとられたことである。二日後、日本に帰ってこの失敗談をすると、家の者達は大笑いをした。私もいっしょになって笑える余裕をとりもどしていた。はじめての短かい英国滞在中のこの失敗は私にはその後大へん役に立った。よく調べてから旅行するようになったし、他人のいうことを鵜呑みにしなくなったからである。

1983年ケンブリッジ滞在中に私がハンプシャーのステイーブントンを訪れたことは言うまでもない。